Et-P013 **時間：6月7日　17:00-18:30**

SATI 観測で得られた内部重力波の季節変化 (2)

Seasonal variation of internel gravity waves measured with SATI (2)

下舞　豊志[1]，塩川　和夫[2]，小川　忠彦[3]，Rudy H. Wiens,[4]
Toyoshi Shimomai[1], Kazuo Shiokawa[2], Tadahiko Ogawa[3], Rudy H. Wiens[4]

[1] 島大・総合理工，[2] 名大ＳＴＥ研，[3] 名大・STE 研，[4] ヨーク大・ISTS
[1] ISFS, Shimane Univ., [2] STE Lab., Nagoya Univ., [3] STE Lab., Nagoya Univ, [4] ISTS, York Univ.

名古屋大学太陽地球環境研究所で製作した,超高層大気イメージングシステム(OMTI)の一部を構成する分光温度計(SATI)は，OH・O2 分子のバンド発光のスペクトルから，それぞれの分子の温度を求めることが出来る．観測結果より Lomb(1975)，Scargle(1982) の方法に従って周波数スペクトルを求め，12 方位角のデータから波動成分の伝搬方向を推定した．その結果，1998 年 PSMOS キャンペーン期間中には南西方向伝搬が多く見られるという特徴が得られた．今回はこの方法を過去約3年間の観測結果に用いて得られた波動成分の季節変化について述べる予定である．

名古屋大学太陽地球環境研究所により製作された，複数の光学観測機器により構成される超高層大気イメージングシステム(OMTI)は，1997 年度より信楽 MU 観測所において連続観測を実施している．OMTI の観測機器の一つである分光温度計(SATI)は検出器に冷却 CCD を用い，OH・O2 分子のバンド発光の数本の輝線を同時に計測することにより，そのスペクトルからそれぞれの分子の温度を時間分解能約 5 分で求めることが出来る．SATI の制御は自動化されており，無人定常観測が可能である．1997 年 11 月の設置以来、機器調整のための 1999 年 4 月-8 月の停止期間を除いて連続観測データが得られている．

前回は Lomb(1975)，Scargle(1982) の方法に従って発光強度，温度の時系列データから周波数スペクトルを求めるプログラムを開発し，12 方位角それぞれのデータから得られた波動成分の予備的解析を行った．その結果，1998 年 1 月～3 月に行われた PSMOS キャンペーン期間中の発光強度からは，OH・O2 ともに南西方向伝搬がやや多く見られるという特徴が得られた．今回はこの方法を過去約3年間の観測結果に用いて得られた波動成分の季節変化について述べる予定である．